

新連載◎次世代に伝えたい「いのち」から見る徳育 1

自分のためだけに生きては幸せになれない。

他者のために生きることによって自分の人生も生きられる。

—ルキウス・アンナエウス・セネカー—
(ローマ皇帝ネロの家庭教師)

生き物の助け合いに見る
「個のいのち」が協働する姿

カツオノエボシという名前の生き物は、海面に浮かんで漂う一匹のクラゲのように見えます。しかし、実はクラゲではなく、ヒドロ虫というたくさんの生き物が集まってできた群体です。

浮かぶためのガスを蓄える浮き袋、魚を捕らえる毒をもった触手の束、消化と栄養配分を担う部分といった複数のヒドロ虫が、それぞれ高度に専門分化し、緊密に結合することでクラゲと同じ様な機能を持った一つの群体をつくっているのです。

驚くべきことに群れ全体を指揮する脳のような司令塔はなく、全体のそ

れぞれのヒドロ虫が助け合って生きています。

見かけは「一つ」でも、内側では多数のヒドロ虫という生命体が協働している——この「一つに見える、多」という構造は、ヒドロ虫のような原始的な生き物だけではなく、自然界を見渡すと色々な生き物に見られます。

アリの社会では、女王アリと、働きアリ、兵隊アリ、そしてオスという役割の分化が明確で、巣全体が一つの生き物のように振舞います。兵隊アリの比率は一定範囲に保たれており、兵隊アリが減ると、元の割合に戻るまで幼虫の発達が兵隊アリ側に傾くというように、アリの巣全体が一つの生命体であると考えたほうが分かりやすいような動きをします。

「群れⅡ自分自身」という
いのちの不思議

ハチが刺針で自らを傷つけながら巣を守る行動も、個としての自分自身の犠牲という感覚ではなく、巣全体が自分自身という感覚なのではないかと言われています。その意味ではハチの巣も一つの生命体と言えるのかもしれない。

哺乳類にも群体的な生活を営む例があります。砂漠の地下に巨大なトンネル網を築くハダカデバネズミは、繁殖を担う女王ネズミと非繁殖の雌の働きネズミが役割を分け合います。女王ネズミがいなくなると、残ったネズミの中から一匹の雌ネズミが女王ネズミの部屋に入り、身体が倍以

上の大きさとなり子どもを産み始めます。

どこかの司令塔からの任命ではなく、群れの状態に応じてネズミの巣全体が自然に調整されるのです。海へ目を向けますと、イルカの群れも一つの生き物のように司令塔なしに高度な協働を実現しています。

「たくさんの細胞」が集まり 変容し生きる私たち

ノーベル生理学・医学賞受賞者のシドニー・ブレナーは、受精卵から成体に至るまでの全細胞を観察した結果、どの細胞も同じDNAの設計図から出発しますが、受け取る合図とそのタイミングの違いによって、



おおつぼのぶゆき
大坪 信之
幼児教室
コベル共同創業者

プロフィール

1963 年福岡県生まれ。
幼児教室コベル共同創業者・コベルメソッドエバンジェリスト。福岡大学 人間関係論非常勤講師。一般社団法人徳育学会会長。日本メンタルヘルス協会公認カウンセラー。ユネスコ Inclusive Policy Lab 専門家。幼児教室コベルの創業以来、30 年以上にわたり心の教育を志し、様々な研究に取り組んでいる。

ある細胞は神経になり、ある細胞は筋肉になり、ある細胞は役目を終えて退場するというように動きが変わることを発見しました。そこに特権的な「王様細胞」は存在しません。

クローン技術からも分かるようにすべての細胞は同じものですが、それぞれが変化して色々な身体の機能を創り出しているのです。輸血をすると違う人の中で他の人の細胞が生き続けるように、私たちも身体が自分自身だと思っていますが、独立して生きているたくさんの細胞の集まりです。つまり、私たちの身体そのものが超個体的な群体であると言えます。

ヒドロ虫が結び合ってカツオノエ

ボシという「上位のからだ」を維持していることと、細胞が結び合って私たちを形づくっていることは同じことなのです。

DNA に組み込まれた 「全人類の幸せ」を願う心

こうした視野で捉え直しますと、個体そのものが、より大きな生命体系の一部であるという姿が見えてきます。

「世のため人のためになる」ということは、きれいだとはなく、言ってみればDNAの中に組み込まれている生物としての本能的な欲求と言えるのかもしれない。

本来の細胞の中に組み込まれている全人類の幸せを願う心が当たり前となるような社会へ、世の中が進化していくことを願っております。

一つの生命体とも言える「超個体」の人類全体の幸福に対する自分の役割を自覚し、その責任を果たしていくということが「世のため人のため」という言葉の意味であるという気づきと実践は、まさに徳育そのものです。